様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５９０２５８

研究課題名（和文）求められる資質能力を踏まえた養護教諭の修士レベル化モデル・教育プログラム開発

研究課題名（英文）Development of a Master's level model and education program for Yogo teachers in the light of the qualities required

研究代表者
岡田　加奈子（okada, kanako）

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：１０２２４００７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では「ワークステージにおける領域別行動目標」の開発、並びに養護教諭の資質能力を達成するための代表的な研修プログラムについては、モデル研修プログラムの開発・評価を行うことを目的とした。その結果、研修プログラムにおけるワークステージの段階、時期、名称、や行動目標、並びに養護教諭に求められる資質能力の視点とその領域について【最終案】の開発、提案を行った。また、フィジカルアセスメントやケースメソッド等の代表的なプロ グラムについては、モデル研修プログラムを開発し、ワークステージ別の効果が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we developed and structured a master's level model and education program of Yogo teachers , as well as a typical program, aimed at the development and evaluation of a model training program. As a result, we were able to propose a structured plan of a master's level model and education program for Yogo teachers . We developed a model training program about the representative programs such as physical assessment and the case method. Through these the effects on each age-group became clear.

研究分野：社会科学　教育学　教科教育学　教員養成

キーワード：養護教諭　教育プログラム　モデル　資質能力

１．研究開始当初の背景

2012 年 8 月に中央教育審議会（答申）では「教員の修士レベル化」が打ち出された。現在，養護教諭の大学での養成は教育学部の他，85％が看護学部・栄養学部・体育学部など，多岐に渡った学問背景の学部で行われている。しかし，大学や学部によっては読み替え等が行われていることも指摘され，養護教諭になるための，学習内容として教授されているとは言い難い点もある。専門性を担保するためには，教諭とは異なる修士レベル化教育プログラムを構築することが急務である。研究代表者は現在まで，養護教諭養成コア・カリキュラムの研究に従事してきた。その研究成果から，学部教育におけるコア・カリキュラムは開発してきたものの，「養護教諭のワーク・ステージ全過程における資質・能力の全体の構造」，例えば，「学部修了，修士レベル，中堅層，指導養護教諭層等において，どのような能力を身につけるのか」については，明らかにされていないことが問題と考えられた。すなわち我々は，養護教諭のワーク・ステージを踏まえた修士レベル化のモデル・教育プログラムの開発が重要と考え，本研究に先駆け 2012 年度においては，養護教諭並びに養護教諭養成大学教員を対象に，どのような力を，いつごろまでに身につけるべきであるか，に関してインタビュー調査を実施した。

２．研究の目的

本研究では，現職養護教諭を対象とした職務の実施度に関する調査結果ならびに，他の研究で開発した「養護教諭のワーク・ステージ全過程における資質・能力の全体の構造」の再検討を行い，それをもとに，「ワークステージにおける領域別行動目標」の開発，並びに養護教諭に求められる資質能力を達成するための代表的な研修プログラムについては，モデル研修プログラムの開発・評価を行うことを目的とした。

３．研究の方法

(1)研修プログラムのための養護教諭のワークステージにおける領域別行動目標の開発

平成 25 年度，現職養護教諭 386 名を対象とした職務の実施度に関する質問紙調査結果ならびに，他の研究で開発した「養護教諭のワーク・ステージ全過程における資質・能力の全体の構造」をもとに，研修プログラムにおけるワークステージの段階，時期，名称や行動目標，並びに養護教諭に求められる資質能力の視点とその領域について【最終案】の開発，提案を行った。検討に際しては，研究メンバーに加え，現職養護教諭等と議論を繰り返し行った。

(2)モデル研修プログラムの開発・評価

代表的なプログラムについては，具体的方法の開発・施行を行った。

(2)-1　救急判断のためのフィジカル・アセスメント研修プログラムの開発

養護教諭の救急処置の判断に対する自信は経験年数に関わらず低く，緊急度・重症度の判断のために必要なフィジカル・アセスメント技術を身につけることを目的とした研修を開発し，2015 年 10 月 17 日に C 県において実施した。受講者は，養護教諭 42 名と養護教諭免許状を取得することを目指している大学生・大学院生 8 名の計 50 名である。

＜研修プログラムの概要＞

養護教諭に必要なフィジカル・アセスメントの考え方について，事例を用いたアクティブラーニングにより，必要な知識と技術を身につけるための研修プログラムである。内容は「１養護教諭にとってのフィジカル・アセスメントの必要性についての講義，２事例を用いた演習（保健室で経験する頭痛事例について，救急判断のプロセスを模擬体験する。個人作業→グループ検討），３事例の解説，４必要なフィジカル・アセスメント技術の実習，５まとめ」であった。

＜開発における工夫＞

①研修方法：事例を用いたアクティブラーニングの手法により，個別の作業を行った上で，グループ検討を行った。個別の作業時間を十分とることで，その後のグループでの検討，事例の解説の理解がより深まることを意図した研修方法をとった。

②研修内容：本研修において，養護教諭に必要なフィジカル・アセスメント項目を示すことが重要である。養護教諭に必要なフィジカル・アセスメントは救急処置場面において，緊急度・重症度を判断するためのものであり，それぞれの状況に応じて，必要な項目の優先順位があることを理解していただく必要がある。その際，保健室で養護教諭が経験する疾患の現状に合わせた，根拠ある項目とすることを心がけた。

(2)-2　ケースメソッドの研修プログラムの開発と評価

①研修プログラムの開発：養護教諭養成に関わる研究者 2 名，現職養護教諭 1 名で現代的課題の一つである，「ネットいじめ」に関係したケースを，実態に基づき作成し，ケースを用い展開する研修プログラムを開発した。

②方法：2015 年 9 月 20 日 C 県において，開発されたケースを用い，ケースメソッド研修を実施し，研修後に研修の効果を図るために無記名自記式調査を行った。受講者は，16 名の養護教諭と 13 名の養護教諭免許状を取得することを目指している大学生・大学院生の計 29 名である。そのうち，調査票の回収率は 29 名のうち 26 名(89.7％)であった。

(2)-3　保健室実践 DVD の開発と評価

①保健室実践 DVD の開発：熟練養護教諭の保健室における児童への対応の様子を撮影し，「保健室実践 DVD」を開発した。まず，2013

年 9 月上旬から 11 月上旬にかけて，撮影協力者が勤務する保健室における児童への対応の様子を各校 3～4 日間，観察しながら撮影した。撮影協力者は，経験年数 15 年以上の小学校養護教諭 3 名とした。次に，撮影した映像の中から養護の視点及びスキル・工夫が複数内在しており教育用教材として活用するのに適していると思われる場面を，養護学を専門とする研究者と現職養護教諭の協力を得て 5 場面選定した。選定した場面は，「保健室実践 DVD－チャプタ 1　保健室での対応の様子－」として活用した。

2013 年 11 月下旬，養護学を専門とする研究者から協力を得て，「保健室実践 DVD」に使用する場面に内在する実践知を示す視点（養護の視点及びスキル・工夫）を抽出する目的で，「保健室実践 DVD」に収録する映像を視聴しながらフォーカスグループインタビューを実施した。分析は，逐語録とビデオ映像をもとに記述分析法と内容分析法を併用して行った。抽出された視点は，「保健室実践 DVD－チャプタ 2　重要なポイント－」に挿入するテロップとして活用した。さらに，2014 年 1 月下旬～2 月中旬にかけてフォーカスグループインタビューで抽出された視点を撮影協力者に提示し，各場面の映像を確認しながら対応の意図や背景について半構造的インタビューを実施した。このインタビューの様子を撮影した映像は，撮影協力者の承諾を得て「保健室実践 DVD－チャプタ 3　養護教諭へのインタビュー－」として収録した。開発にあたっては，「千葉大学生命倫理審査委員会」の承認を受けた。

②「保健室実践 DVD」を用いた研修の評価：現職養護教諭を対象に「保健室実践 DVD」を用いた研修を行い，研修で使用したワークシート及び事後調査（質問紙調査）の分析により「保健室実践 DVD」を用いた研修の評価を行った。まず，2014 年 8 月～9 月に A 県及び B 県において現職養護教諭を対象として「保健室実践 DVD」を用いた研修を実施した。受講者は，A 県の現職養護教諭 40 名及び B 県の現職養護教諭 45 名であり，計 85 名の現職養護教諭を「保健室実践 DVD」を用いた研修の評価における対象者とした。

A 県・B 県合わせて計 80 名の養護教諭からワークシートを回収したが，記入されたワークステージの内訳は，「Ⅱ.基礎形成期」が 5 名（6.3%），「Ⅲ.向上期」が 7 名（8.8%），「Ⅳ.充実・発展期」が 16 名（20%），「Ⅴ.統合期」が 52 名（65%）であった。

事後調査（質問紙調査）については，受講者に研修から約 2 週間経過後に返送してもらうように依頼し，回収した。A 県・B 県合わせて計 52 名の養護教諭から回収できたが，52 名のワークステージの内訳は，「Ⅱ.基礎形成期」が 1 名（1.9%），「Ⅲ.向上期」が 4 名（7.7%），「Ⅳ.充実・発展期」が 9 名（17.3%），「Ⅴ.統合期」が 38 名（73.1%）であった。

(2)-4　国内・国際学術集会発表・論文投稿等の省察による実践力の向上プログラム

①実践力向上プログラム開発：現職養護教諭を対象とし，講習会を 5 回開催した。参加者の募集は，養護教諭に関わる学会や養護教諭の購読雑誌を通じて案内を配布した。研修プログラムの構成については第 1 回目の講習会前に実施した事前調査結果に基づき，参加者の参加目的，要望などを加味し内容を精選し構成した。

②プログラム内容：国内・国際学術集会・論文投稿等を行うための基本的な内容について講義し，また内容に関わる演習を行うなど実践的な学びができるようプログラムを構成した。講習は 5 回実施した。

③講習会実施後の調査：毎講習会後に「講習会の内容」「目的の達成度」「満足度」について，無記名自記式調査を実施した。

④講習会参加者への追跡調査の実施：講習会終了後の半年後に，講習会で修得したスキルが，養護教諭の日々の実践にどのように生かされたのか，1 回でも参加した実績のある参加者 39 名全員に郵送にて調査を配布した。

４．研究成果

(1)研修プログラムのための養護教諭のワークステージにおける領域別行動目標の開発

現職養護教諭を対象とした職務の実施度に関する調査結果ならびに，他の研究で開発した「養護教諭のワーク・ステージ全過程における資質・能力の全体の構造」の再検討を行った。養護教諭に求められる資質能力を踏まえ，「養護教諭が有すべき実践力」とともに，「養護教諭が有すべき基本姿勢」の二つの視点でとらえ，「ワークステージにおける領域別行動目標」を最終案として提案した。なお，研修の評価は，行動目標に応じて，研修指導者が対象者に対する評価基準を作成して行うこととした。

①「養護教諭が有すべき基本姿勢」及び「養護教諭が有すべき実践力」：「養護観の確立」と「教育職員としての自覚と使命」を「養護教諭が有すべき基本姿勢」とした。また，「養護教諭として求められる専門力」と「組織の一員として求められる実践力」を「養護教諭が有すべき実践力」とした。「養護教諭として求められる専門力」は領域として「1 保健管理力，2 健康教育力，3 生活指導力」とした。なお，各領域の内容は，「1 保健管理力」は，救急処置・体制，健康実態の把握，疾病予防・管理，学校環境，「2 健康教育力」は，保健学習，保健指導，「3 生活指導力」は，子どもの生活力の育成とした。「組織の一員として求められる実践力」は，「4 連携・協働力，5 学校経営，6 組織活動推進力」とした。領域の内容では，「4 連携・協働力」は家庭・地域・外部機関との校内外連携・協働とした。

②ワークステージと領域別行動目標：養護教諭のワークステージは，教員養成と研修の一体化（中央教育審議会 2012）を考慮し，免許

取得前の養成期を加えて，全 5 段階とした。「Ⅰ.養成期（免許取得前 1～4 年)」,「Ⅱ.基礎形成期（経験年数 1～3 年)」,「Ⅲ.向上期（経験年数 4～10 年)」,「Ⅳ.充実・発展期（経験年数 11～20 年)」,「Ⅴ.統合期（経験年数 21 年～)」とした。

また、5 つの各ステージ目標（大項目・中項目を掲げた。「Ⅰ.養成期」のステージ目標（大項目）は，基礎的知識・能力の習得,「Ⅱ.基礎形成期)」では，職務の円滑な実施，ステージ目標,「Ⅲ.向上期」の大項目では，根拠に基づく実践と評価,「Ⅳ.充実・発展期」では，組織的推進,「Ⅴ.統合期」では実践の統合と育成とした。

以上のように，養護教諭に求められる資質能力とする「養護教諭が有すべき異本姿勢」の 2 つ,「養護教諭が有すべき実践力」の 6 つの力（領域）とその内容について，各ステージ毎の行動目標を示した。たとえば「養護教諭が有すべき基本姿勢」における「養護観の確立」について各ステージにおける行動目標は,「Ⅰ.養成期」では養護教諭としての養護観を考えることができる,「Ⅱ.基礎形成期」では実践を通して，自らの養護観を自覚することができる,「Ⅲ.向上期」では養護観に基づいた実践ができる,「Ⅳ.充実・発展期」では，多様な価値観を理解し，養護観を再構築することができる,「Ⅴ.統合期」では自らの養護観を追究し続けることができるとした。また,「養護教諭として求められる専門力」の「1 保健管理力，救急処置」の各ステージにおける行動目標は,「Ⅰ.養成期」では救急処置を行うための基礎的な知識・能力を修得する,「Ⅱ.基礎形成期」では救急処置における判断の根拠を説明し，適切な救急処置,保健指導を行うことができる,「Ⅲ.向上期」では救急処置・保健指導を振り返り，評価し，根拠に基づいて改善することができる,「Ⅳ.充実・発展期」では，ミドルリーダーとして，救急処置を研究的視点で見直し，改善するとともに，他の教職員と連携して組織的に取り組むことができる,「Ⅴ.統合期」では実践を研究的にまとめ発信し，専門職としてのレベルアップや後進の育成に寄与することができるとした。

本研究の結果，養護教諭のワークステージ（段階，時期，名称，目標）において，養護教諭に求められる資質能力の領域別行動目標が明らかになった。今後，各ステージの行動目標のみならず，養護教諭が，習得できていない力を配慮して，研修を企画していく必要がある。また，今回の研究では，力量形成を主に検討を行ったが，今後は，専門職としての職を全うしながら一人の人として自己実現を遂げていく姿を表すキャリア発達も視野に入れた検討が必要と考えられる。

(2)モデル研修プログラムの開発・評価

(2)-1　救急判断のためのフィジカル・アセスメント研修プログラムの開発

①研修におけるワークステージ別評価：参加者のうち，養護教諭を対象に研修評価のための調査を実施した。調査票の回収率は 42 名のうち 36 名(85.7%)であった。対象の内訳をワークステージ別にみると,「Ⅱ.基礎形成期」(経験年数 1～3 年)が 7 名,「Ⅲ.向上期」(経験年数 4～10 年)が 10 名,「Ⅳ.充実・発展期」(経験年数 11～20 年)が 5 名,「Ⅴ.統合期」(経験年数 21 年～)が 14 名であり，以上の 4 つのステージに分けられた。

調査項目は，研修前に現在の状況を，研修後に研修によって身に付いたもの（研修を契機に身に付くもの）である。救急処置における各ステージの目標として,「Ⅰ.養成期」は「救急処置を行うための基礎的な知識・能力を習得している」(レベル 1),「Ⅱ.基礎形成期」は「救急処置における判断の根拠を説明し，適切な救急処置，保健指導を行うことができる」(レベル 2),「Ⅲ.向上期」は「救急処置・保健指導を振り返り，評価し，根拠に基づいて改善することができる」(レベル 3),「Ⅳ.充実・発展期」は「ミドルリーダーとして，救急処置を研究的視点で見直し，改善するとともに，他の教職員と連携して組織的に取組むことができる」(レベル 4),「Ⅴ.統合期」は「実践を研究的にまとめ発信し，専門職としてのレベルアップや後進の育成に寄与することができる」(レベル 5) と設定した。各ステージの養護教諭で，研修前に目標に達しているものは,「Ⅱ.基礎形成期」42.9%,「Ⅲ.向上期」10.0%,「Ⅳ.充実・発展期」0%,「Ⅴ.統合期」7.1%と少なかった。研修により,「Ⅱ.基礎形成期」では 85.7%がレベル 2 以上が身に付くと回答しており，現状と比較すると平均 1.4 レベルの上昇が見られた。向上期ではレベル 3 以上が身に付くと回答したものは 10.0%であったが，現状と比較すると 1.0 レベルの上昇がみられた。「Ⅳ.充実・発展期」では 0.8 レベル,「Ⅴ.統合期」では 0.7 レベルの上昇であり，経験年数が短い者ほど，研修によるレベルの上昇が大きかった。一方で，研修により身に付くと回答した内容は「Ⅱ.基礎形成期」では概ねレベル 3 であったのに対し,「Ⅴ.統合期」では最高でレベル 5 であり，現状に応じて，身に付くと感じたレベルが異なる傾向がみられた。つまり，現状のレベルが高いほど，研修で身に付くと感じたレベルが高かった。また，本研修は救急処置に関するものであったが，研修によって身に付くと感じたものは健康実態の把握，疾病予防・管理，学校環境，健康教育，健康相談・保健指導など多岐にわたっていた。

②まとめ：本研修の効果は，経験年数が短いほど高い傾向が見られたが，現状のレベルが高い養護教諭にとっては，それに応じた効果もみられた。従って，より早期に実施するのが効果的ではあるが，振り返りとして「Ⅲ.向上期」以降にも使えるものであると考えられた。

(2)-2　ケースメソッドの研修プログラムの開発と評価

①開発された研修プログラムの概要：開発されたケースの概要は，保護者からの「子どもが，いじめにあっていて学校に行けない」との訴えから，「ライン」を通しての人間関係のトラブルに端を発した「いじめ」の可能性のある事案である。研修プログラムの学習テーマを「①ネット上の生徒間で起こる人間関係のトラブルが起きた時，生徒にどのような対応をしたらよいのだろうか」，「②いじめの訴えに対し，どのように対応すべきだろうか」，「職員間で連携して対応するためには，どうしたらよいのだろうか」の3点とし，具体的な連携・協働のあり方について考えさせる内容構成とした。プログラムの構成は，イントロダクション(5分)，ガイダンス(5分)，アイスブレイキング（5分），個人ワーク（10分），グループ・全体討議（50分），シェアリング（15分）であった。

②対象：対象の内訳は，経験年数の不明な1名を除いた25名のうち，「Ⅰ.養成期」が11名，「Ⅱ.基礎形成期」が4名，「Ⅲ.向上期」が5名，「Ⅳ.充実・発展期」が4名，「Ⅴ.統合期」が1名であった。「Ⅴ.統合期」は1名のみであったため，分析対象から除外し，計24名を対象とした。

③総合評価：研修に対するワークステージ別評価から，「Ⅳ.充実・発展期」はケースメソッド研修に対する学習効果を高く評価していると考えられる。調査の結果は参加者の学びに関しては，「Ⅲ.向上期」と「Ⅳ.充実・発展期」の平均値が高い結果となった。これは，経験を重ねるにつれ様々な立場からケースを考えることができ，自信をもって提案できていることを示している。「学習内容に関する質問項目」では，どのワークステージでも平均値が高く，自由記述では「グループディスカッションの中で，様々な意見が出て，自分の思い至らなかった考えを知ることができた。」というような意見が全てのワークステージから出ていた。これらのことから，学習内容に関してはすべてのワークステージにおいて効果があったといえる。

以上を総合すると，ワークステージの中でも，「Ⅳ.充実・発展期」は様々な経験があるため，学びが多く，各実践力における深まりが生まれることが考えられた。「Ⅰ.養成期」の学生は経験が少ないため，本結果をふまえてより効果を体験できるような働き掛けを考えていくことが今後の課題である。

(2)-3　「保健室実践DVD」の開発と研修の評価

ワークステージの内訳は，「Ⅳ.充実・発展期」が20%，「Ⅴ.統合期」が65%と，「Ⅳ.充実・発展期」以降の養護教諭が8割以上を占めた。「Ⅱ.基礎形成期」では，「人の保健室での対応をみる機会がないので，自分の対応の仕方と照らし合わせて非常に勉強になる」，「Ⅲ.向上期」では，「自分はどのように対応しているか振り返るいい機会になりました」，「Ⅳ.充実・発展期」では，「毎日自分がやっている実践に慣れきっていたことを痛感した」，「Ⅴ.統合期」では「日頃，他の学校の保健室対応を見る機会がないため，大変参考になった」「実際の保健室の様子を見ることで，またそれをグループディスカッションすることで，自分では気付かないことがみえてきたり，勉強することがたくさんあったりした」などの感想が見られ，分析結果及び記述から「保健室実践DVD」を用いた研修は経験年数の長さに関わらず有効な研修方法であることが伺えた。

事後調査の結果，回答者の9割を超える養護教諭が本研修を受けたことによる意識の変化を感じていた。事後調査を提出した養護教諭のワークステージは，「Ⅴ.統合期」が7割以上を占めていた。その記述から，経験が長い養護教諭にとっても対応の省察につながる研修であったことが伺えた。

これらの結果を通して，「保健室実践DVD」を用いた研修は効果的で意義のある研修であることが示唆された。しかしながら，今回は評価にあたってソフトデータのみを使用したため，行動の変化や実践への活用について受講者の記述と現実の行動にずれがある可能性は否めない。今後は第3者による客観的な評価も取り入れるなどの工夫が必要である。また，受講者群と非受講者群に分け，より客観的な研修評価を行う必要があると考える。

(2)-4　国内・国際学術集会発表・論文投稿等の省察による実践力の向上プログラム

①講習会参加者への追跡調査：講習会参加者39名に配布し17名より回答を得た。(回収率43.6%）ワークステージ別内訳は，「Ⅱ.基礎形成期」の養護教諭3名，「Ⅲ.向上期」7名，「Ⅳ.充実・発展期」7名であった。「講習会でどのような能力が身についたか」の質問では，「Ⅱ.基礎形成期」の養護教諭は，「研究の基礎や計画書を書く力」，「研究の段取り」，「Ⅲ.向上期」は，「問題点を把握する視点」「研究的な視点の持ち方」「研究推進力」「表現方法」「分析力」「研究に対する抵抗感の軽減」，「Ⅳ.充実・発展期」は，「焦点化」「理論的思考」「実践を研究に結びつける視点」「研究姿勢」「エビデンスに基づいた研究」「研究の進め方」などが示されていた。

「現在，養護教諭をする上でどのように役立っているか」の質問に対しては，「Ⅱ.基礎形成期」の養護教諭は，「健康診断や健康相談などの段取り」「順序立てて取り組む能力」，「Ⅲ.向上期」は，「課題を意識できる」「養護教諭独自の視点，見方ができるようになった」「視野が広がった」「理論的に説明することができるようになった」「実践を研究的な視点での評価できるようになった」「学会へ興味を持ち参加できるようになった」「常に

前向きになった」など日々の実践活動の中で多くのことに役立っているという結果が得られた。「Ⅳ.充実・発展期」は「相手に分かりやすく伝えられるようになった」「多くの情報の中で優先順位をつけられるようになった」「実践を研究にまとめる意欲の醸成」「研究的な視点を持つことにより物ごとを多角的に捉えられるようになった」「現象の意味や傾向について振りかえることができるようになった」など，研究的な思考の持ち方が実践活動を行う上で合理的に物事を進めていくことに役立っていることが推測された。「今後，養護教諭をする上でどのように役立っていくと思うか」という質問項目については，「Ⅱ.基礎形成期」の養護教諭は，「日ごろの疑問を研究的に省察」「チーム研究」，「Ⅲ.向上期」は「客観的に物事を捉えられる」「実践を掘り下げる力」「実践力の向上」「効果的に伝える力」「理論立てて深く追求する力」，「Ⅳ.充実・発展期」は「実践をやりっぱなしにせず，まとめるという意欲」「地域の研究，後身のレベルアップにつながる」「現場の感覚を個人として終わらせず全体で共有し深めていくことができる」などが示されていた。

②総合評価：本研修プログラムの開発によって，個人的な研究能力の向上にとどまらず，日ごろの養護活動の実践力の向上につながることが示唆された。また個人的な能力の向上に留まらず，チームや地域の発展にも影響を及ぼす可能性が示されたといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①黒子彩子，児童への対応場面における熟練養護教諭の実践知を示す視点の抽出－保健室実践DVDの開発を通して－，学校健康相談研究，査読有，第12巻2号，2016，145-161

〔学会発表〕（計７件）

①齊藤理砂子　他，養護教諭の基本特性と中学生の「自己決定・判断能力」を育成するための対応力の関連，日本健康相談活動学会第12回学術集会，2016.3.6，東京学芸大学（東京都小金井市）

②齊藤理砂子　他，中学生の自己表現能力を育成するための対応力の尺度開発～同時多母分析と小学校・中学校に勤務する養護教諭の比較から～一般社団法人日本学校保健学会第 62 回学術大会，2015.11.29，岡山コンベンションセンター（岡山県岡山市）

③齊藤理砂子　他，中学生の対人関係能力を育成するための対応力の尺度開発～同時多母集団分析と小学校・中学校に勤務する養護教諭の比較から～，一般社団法人日本学校保健学会第 62 回学術大会，2015.11.28，岡山コンベンションセンター（岡山県岡山市）

④齊藤理砂子　他，中学生の自己決定・判断能力を育成するための対応力の尺度開発～小学生，中学生を対象とした養護教諭の対応の因子分析から～，第 24 回日本健康教育学会学術大会，2015.7.4，前橋市中央公民館（群馬県前橋市）

⑤黒子彩子，ワークショップ 4「DVD 映像から学びあう保健室実践」，日本養護教諭教育学会第 22 回学術集会，2014.10.12，千葉大学（千葉県千葉市）

⑥三村由香里　他，養護教諭のワークステージにおける資質能力に関する研究－現職養護教諭への質問調査より－，日本養護教諭教育学会第 22 回学術集会，2014.10.12，千葉大学（千葉県千葉市）

⑦上村弘子　他，ワークステージに着目した養護教諭に求められる実践力－386 名を対象とした質問紙調査結果より，日本養護教諭教育学会第 22 回学術集会，2014.10.12，千葉大学（千葉県千葉市）

６．研究組織

(1)研究代表者

岡田　加奈子(OKADA, Kanako)
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：１０２２４００７

(2)研究分担者

・三村　由香里(MIMURA, Yukari)
岡山大学・教育学研究科・教授
研究者番号：１０３０４２８９
・竹鼻　ゆかり(TAKEHANA, Yukari)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：３０２９６５４５
・中下　富子(NAKASHITA, Tomiko)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：５０３９８５２５
・工藤　宣子(KUDO, Noriko)
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：６０３０５２６６
・鎌塚　優子(KAMAZUKA, Yuko)
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号：８０６１６５４０

(3)連携研究者

・松枝　睦美(MATSUEDA, Mutsumi)
岡山大学・教育学研究科・教授
研究者番号：３０３４７６５３
・上村　弘子(KAMIMURA, Hiroko)
岡山大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：４０５５５３４８
・齊藤理砂子（SAITO,　Risako)
聖学院大学・こども心理学科・准教授
研究者番号：９０６３４９０７

(4)研究協力者

・高柳　佐土美(TAKAYAGI, Satomi)
千葉大学教育学部附属中学校・養護教諭
・黒子　彩子(KUROKO, Ayako)
川崎市立玉川中学校・養護教諭
・荷見　さつき(HASUMI, Satsuki)
千葉市立幕張西小学校・養護教諭